

地域に根ざした福祉実習教育の試み

—プログラム企画演習の展開から—

Teaching Social Work Practice in the Community

— A Programme of activities with the Local Citizen —

加登田 恵子
Keiko KATODA

はじめに

大学における社会福祉実習教育の在り方を考える際に、基本的に検討されるべきことは、1) その教育目標の設定、2) 教育目標に合致した教育内容の在り方、3) 教育方法の工夫・開発であろう。しかし、社会福祉が〈実験の学〉ではなく〈実践の学〉であること、すなわち現実にワーカーとクライアント(サービス利用者)、あるいは施設居住者と職員がその場に存するというリアルな「福祉現場」がそのまま〈実習〉という教育の場であることを考えると、事は単純でなく、そのことからくる実習教育の特性、さらには限界や可能性について考慮する必要がある。

本学では、社会福祉実習教育に〈地域〉あるいは〈地域性〉というファクターを持ち込み、〈地域〉という福祉現場を意図的に設定することによって、社会福祉専門職をめざす学生の実践力(トータルな専門的技能)を高めることを試みている。本稿では、山口県立大学社会福祉学部で実施している〈プログラム企画実習〉の展開を通じて、地域に根ざした実習教育の可能性について検討したい。

1. 現場体験学習の目的

社会福祉の援助活動には、歴史的に科学(サイエンス)主義の流れと人道主義(ヒューマニズム)の流れの2大潮流があると言われる。科学主義は概念構成の準拠枠を医学モデルに求め、その後を行動科学の成果を取り入れて診断学派として継承され、他方、人道主義の流れは「最高の社会福祉

援助活動は、科学的なものではなくむしろアートである」との主張をしてきた。しかしその後、激動する社会変動のなかで医学モデルの不十分さが指摘されるようになり、今日では、新たにサイエンスとアートがヒューマニズムを媒体に相互に補完する関係をとる〈生活モデル〉が志向されている。¹ というのが、北米を中心とした援助技術論の歴史に関して大方の理解するところであろう。

この場合の〈アート〉とは、具体的には何であろうか。秋山薊二は、Gotshalk, Dの概念を下敷きにして「アートとは、経験、志向、エネルギー、目的などによって培われた緻密性、感性、美感を通して、人間に内在する価値を具体化する創造的産物と行為である」と定義している。²

他方、我が国の福祉専門職の用いてきた援助技術とその活用の歴史は、北米の潮流と全く同じではない。むしろ我が国の方は、「理論と実践は違う」「理論は現場では通用しない」として表現されるように、理論と実践の統合が叫ばれつつも、実際の現場ではかなり主観に偏ったかたちのアート主義であったのかもしれない。近年大学における「社会福祉実習」という科目が、社会福祉士資格との関係で「社会福祉援助技術現場実習」という名称に変わり、今や全国的に定着してきたが、そこではサイエンスとしての技術性を高めるという観点から、あえて「技術」の実習という点が強調されていることは、それに対するアンチテーゼの意味もあろう。

しかしながら、社会福祉「援助技術」があくま

でサイエンスとアートの統合されたものと捉える限り、現場体験学習の目的においてもその両者を意識することとなる。

2. 技術習得学習としての社会福祉〈現場実習〉の特色と課題

ここで、狭い意味での技術教育という観点から〈福祉実習教育〉についてみると、いくつかの特色が見られる。例えば〈実験教育〉との比較からその特色をまとめるとおよそ以下の点となろう。

- 1) 福祉現場は、実験室と異なり、対象分野も職務内容もかなり広範で多様である。
- 2) 学生が実習先で得られる〈体験学習の質〉は、実験のようにコントロールできないばかりか、かなり多様である。
- 3) 科学実験のように、できるようになるまで反復体験できない。
- 4) 実習生の関わりが直接クライアントに対する影響や責任について考慮する必要がある。

これらの特色は、まず大前提として、現場実習がそれぞれが配属される現実の〈福祉現場〉という与件から成り立つということからくる。しかも、実際の福祉現場は、実験室のように一人一人の学生の〈実習環境〉を限定することは難しい。たとえば全ての学生を一つの施設・機関に配属したとしても、それは福祉の分野からするとごく限られた体験となる。ジェネリック・ソーシャルワーカー養成のためには、できれば複数以上の現場を体験させる必要があるのではないだろうか。これは同じ現場実習である医療技術者のための病院実習や、学校教員養成のための教育実習とも異なる点であろう。

次いで、そこで提供される〈実習体験の質〉についてみると、福祉現場における実践の条件やレベルは、近年めざましく向上したとは言えこれもまた千差万別であり、学生が現実に実習先で得られる〈体験学習の質〉はかなり多様である。実習教育方法論としては、標準的な実習プログラムの策定をしたり、実習記録様式の統一化を試みるとともに、学生の個別実習体験をできるだけ相対

化するために、事後学習として〈実習報告会〉や〈実習事例学習〉を実施している。しかし、個々の学生にとって、配属された「特定の現場」における「個別の実習体験」が、その学生の問題意識や福祉実践へのモチベーション、ひいては社会福祉観や実践観の形成、すなわち〈アート〉に関する部分に、きわめて大きな影響を与えている。

また、援助に関する〈技術〉の習得・深化を課題に置く場合であっても、自然科学実験のように反復体験できない。実習生ができるようになるまでまで同じクライアントに何度でもやってみるといった類の体験を提供することはできない。自然科学実験のように、原理的な体験でも仮定の上に成り立つシミュレーションでもないからである。

さらに、福祉現場では、実習生の関わりがクライアントに対する影響や責任について考慮する必要がある点も重要である。〈実験〉であれば、扱う薬品や機材は物だから行為の対象そのものに対しての配慮や責任を問われることは、まず無い。

ただし従来は、現場実習の受け入れの際の契約は、基本的に大学（養成施設）と福祉施設（職員集団）間にのみ交わされるなど、とかくクライアント自身の立場は軽視されがちであった。³ クライアント諾否は、職員側からの配慮という様式を通して行われていることが多い。実習生は、職員の指導の下に、職員たるべく、職務の体験学習を行うからである。しかし、クライアントから見ると、実習生という「養成途上のワーカー」が実際の生活や抱えている問題に、どの程度、どのような方法で関わってくるのかという問題は極めて重大であり、施設居住者等の権利擁護の観点からすると、もっときめ細かい配慮や手続きの検討が必要であろう。

また逆に、一部の機関では、クライアントのプライバシー保護を危惧するあまり、公務員としての守秘義務を名目的な理由に、手続き的課題には踏み込まないまま、実際のケースについては触れずに行政説明に終始する実習が行われたり、あるいは実習生そのものを受け入れられないという場合もある。しかし、基本的にクライアント情報の

開示がなければ、現場実習は不可能である。福祉援助はクライアントのプライバシーに介入することによって成り立つからである。

現在は、これも担当職員の良識と裁量に委ねられている場合が多いが、この場合もクライアントによる実習生受け入れ承諾の手続き・方法、さらには行政機関の情報開示の在り方を含めて、実習教育方法論の視点からも厳密な整理が必要とされよう。

以上縷々のべたが、要するに「社会福祉専門職（ジェネリック・ソーシャルワーカー）としての、専門技術を習得させるために、現場実習では、最低限どのような質と量の体験が必要とされるか」と問うた場合、その具体的な指標や客観的な体験レベルの設定、その提供の仕方の標準化には非常な困難が伴っている。さらに、実習によって獲得すべき行動様式については、我が国においては未だコンセンサスを得るに至っていない、ということである。⁴

社会福祉実践における「技術」は単にテクニックをさすのではなく、スキルやメソッドと有機的な関連をもった包括的な概念である。⁵ かくして福祉現場実習教育担当者は、まさに多種多様な福祉現場の中で、しかも「一期一会の現場体験」のなかで、全ての学生が共通して最低限つかみ取らなければならないことについて、ある程度明確化して伝える努力をし、着実につかみ取るように随時スーパーバイズすること、さらに効果的な〈場〉を提供することが課題となろう。

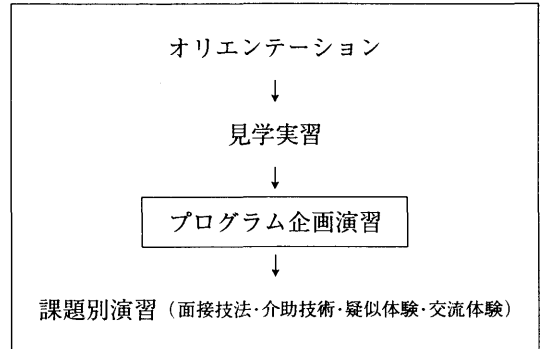
前述したように、少なくとも今日のソーシャルワーカーには、〈サイエンス〉と〈アート〉を統合的・具体的に活用する技能を身につけることが要請されている。法令により社会福祉士の受験資格の要件として「一定の種別の施設における、一定の時間数の現場実習」が定められたが、しかしこの外在的基準は最低限の枠として、基本的な実践力をもつソーシャルワーカーの養成に向けて、現場実習教育も内容と方法が問われる段階にきているということをもつて押さえておきたい。⁶

3. プログラム企画演習の展開

1) カリキュラムの上の位置づけ

本学における「プログラム企画実習」は、「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」の見学実習に続くプログラムとしてを実施している。〈図1〉

〈図1〉社会福祉援助技術現場実習Ⅰの構成



「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」（以下「実習Ⅰ」）は、2年次対象の必修科目であり、社会福祉士の受験資格の取得の希望に関わらず、本学部の卒業要件として課されている。従って、後に展開する社会福祉士養成を念頭においた「実習Ⅱ」「実習Ⅲ」における機関・施設配属実習との関連で言えば〈基礎実習〉であると同時に、資格の取得に関わらず、社会福祉学部卒業生として最低限体験的に学習させたい内容を盛り込む必要がある。

そこで当科目の内容には1) 福祉現場の諸形態の見学、2) 基礎的援助技術（面接・介助）、3) 援助関係を考える体験（被援助者の疑似体験・交流体験）とともに、この4) プログラム企画演習を盛り込んだ。

2) 目的と課題

プログラム企画演習の演習の目的は、〈地域〉における活動を通して、1) 主体的な実行力の醸成、2) 社会性を育み、コミュニケーション能力を高める、3) 生活者としての感覚を養う、の3点にある。

また、課題は以下の3点である。

- ① 実際のプログラム（行事や活動）の実施過程を通じてグループワークの体験を

地域に根ざした福祉実習教育の試み

する。

- ② できるだけ地域の人々と関わりをもったプログラムを企画することによりコミュニケーションの実習をする。
- ③ 大学祭等の機会を活用したプログラムを企画することによって、プレゼンテーションの実習をおこなう。

3) 方法

クラスをサブグループに分け、グループ活動を基本とする。グループ作りに当たっては、あらかじめ担当教員がその年の活動テーマ・条件を提示し、学生がその中から選択する方式である。学生のモチベーションをできるだけ高めるために、多少の人数のアンバランスがあっても学生の希望を優先して編成する。

授業時間は、毎週月曜日の5・6・7コマ(135分)を当て、報告会を含めて8～9回(約2

ヶ月強)の期間が充てられる。しかし、地域との連絡や大学祭を生かすには、授業時間に留まらずかなり柔軟な活動形態となることを予め周知する。

全体講義として、イベント企画の方法(組織、スケジューリング、予算等の立案方法)を講義し、グループ毎に「企画書」の作成、全体会による「中間報告」と、グループワーク評価を含んだ「報告書の作成」が課せられる。

3) 活動の展開

現在までの5年間の活動内容は以下の〈表1〉の通りであった。

なお、4期生からグループの数を増やし、担当教員のシフトを再編成した。その理由は、プログラムが3年を経てマンネリ化しつつあったこと、本学部の2年生全員を大学祭でプレゼンテーションさせることとすると小規模大学においては全学

〈表1〉プログラム企画演習における活動内容

	グループ	企画内容	地域の資源など	備考
1 期 生	A ふれあい交差点	大学祭に、地域住民と共同企画行事を実施することで、大学と地域、学生と高齢者との交流を図ることを目的とする。 大学所在地の老人クラブと共同して、郷土料理の模擬店を開く。	山口長寿開発センター 「はつらつ人生支援事業」の活用 地域の3老人クラブ 社会福祉協議会	郷土料理の伝承(いとこ煮、南蛮煮) 当日の調理 お袋の味喫茶店
	B 昔の遊び	上記グループの話し合いの過程で、派生したもの。地域の子どもたちと昔の遊びをすることを通して、学生と子ども、高齢者の交流を図ることを目的とする。	児童センター 大学所在地の小学校 子ども会	竹細工、缶ぽっくり、的当てゲーム、輪投げなどのてづくりおもちゃ
	C クラス対抗ステージ	大学祭で実施される全学プログラムに、学部として参加する。当時持ち上がっていた「男女共学化問題」について、素朴な疑問や不満、主張を話し合い、それを下にパロディ形式のミュージカル(パフォーマンス)をおこなう。	大学祭実行委員会	手話を取り入れたミュージカル
2 期 生	A 餅つき	大学祭に、地域住民と共同企画行事を実施することで、大学と地域、学生と高齢者との交流を図ることを目的とする。 大学所在地の老人クラブと共同して、餅つき大会をする。	山口長寿開発センター 「はつらつ人生支援事業」の活用 地域の3老人クラブ 社会福祉協議会	ヨモギ摘み餅つき

	グループ	企画内容	地域の資源など	備考
2 期 生	B 駄菓子屋と紙芝居	昔懐かしい駄菓子屋を再現し、学生と子ども、高齢者の交流を図ることを目的とする。手作り紙芝居の上演を通して子どもと交流する。	大学所在地の小学校子ども会	郷土の民話の聞き取りを下にした紙芝居作成
	C クラス対抗ステージ	大学祭で実施される全学プログラムに、学部として参加する。障害者とのコミュニケーション・バリアの解消をめざして、点字の照会をモチーフにしたステージ・パフォーマンスをおこなう。	大学祭実行委員会	点字の紹介
3 期 生	A おちうまい、なつかしの味、宮野味	大学祭に、地域住民と共同企画行事を実施することで、大学と地域、学生と高齢者との交流を図ることを目的とする。大学所在地の老人クラブと共同して、郷土料理の模擬店を開く。	山口長寿開発センター 「はつらつ人生支援事業」の活用 老人クラブ 社会福祉協議会 農協	郷土料理の伝承（のっぺ、焼き芋、豆ご飯） 当日の調理 模擬店
	B アニメーム・ママを探しに	地域の子どもたちに向けてアニメームを上演することを通して、学生と子ども、聴覚障害者の交流を図ることを目的とする。	大学所在地の小学校子ども会 聴覚障害者	アニメーム（棒や輪を使ったアニメーションを使用する音響劇）の制作・上演
	C フリーマーケット～バザールでござーる	フリーマーケットを主催し、地域の人々と学生の交流を深める。収益金を開発途上国援助のためにユニセフに寄付する。	町内会、教員、全学学生	
4 期 生	A おなかいっぱい、もういっぱい、なつかしの味をいかがですか	大学祭に、地域住民と共同企画行事を実施することで、大学と地域、学生と高齢者との交流を図ることを目的とする。大学所在地の老人クラブと共同して、郷土料理の模擬店・餅つき・受託販売をおこなう。	老人クラブ 社会福祉協議会 地域の福祉施設	郷土料理の伝承（もち、ぜんざい、ひじきご飯、呉汁） 当日の調理 模擬店 地域の福祉施設で制作したものの受託販売
	B 家から街へ～福祉マップづくり	既存の福祉マップを収集分析するとともに、各種障害者にアンケート調査をおこない、日常生活に密着した福祉マップを作成する。	地域の視覚障害者、聴覚障害者、身体障害者、高齢者	ビデオマップの作成
	C 学童保育	地域の学童保育の活動に継続的に参加するなかで、児童や職員のニーズを発掘し、プログラムを企画実施する。	地域の留守家庭児童学級	通常保育への参加 誕生会、七夕会の企画実施
	D 子育てサークル～ぶるるんほっぺ	地域の子育てサークル「ぶるるんほっぺ」の活動に参加することを通じて、子育て中の母親のニーズを知るとともに、行事を企画実施する。	主任児童委員 地域の子育てサークル 消費生活アドバイザー	夏休みに向けての救急法講座 リサイクル問題の学習会 芋掘り大会

地域に根ざした福祉実習教育の試み

	グループ	企画内容	地域の資源など	備考
4 期 生	E HAPPY HAPPY HAP	障害児の母親のグループ「ウッドムーン」との共催で、夏休み中の障害児の学童保育活動（HAP：障害児の冒険遊び場）を実施することを通じて、障害児とともに生きる社会づくりの課題や方法について考える。	重度障害児を抱える親のサークル 医師、看護婦、PT、OT、小中学校教員、保育士、在宅栄養士、主任児童委員、その他のボランティア 高校生・専門学校生・他大学生	大学内の遊休施設を借用した活動の創造
	F おあしすの会	地域の在宅高齢者を対象にしたミニ・デイサービス「おあしすの会」の日常活動に参加するとともに、行事の企画・実施をおこなう。	地区社会福祉協議会 地域のデイサービス・グループ 在宅要援護高齢者支援ボランティアグループ（在宅保健婦のサークル）	日帰りバス旅行の実施
5 期 生	A お芋が広がる宮野の輪	大学祭に、地域住民と共同企画行事を実施することで、大学と地域、学生と高齢者との交流を図ることを目的とする。 大学所在地域の老人クラブと共同して、さつま芋の栽培と焼き芋の模擬店をおこなう。	山口長寿開発センター「はつらつ人生支援事業」の活用 老人クラブ 社会福祉協議会	近隣の遊休畑の借用 サツマイモの植え付け 畑の管理、収穫 当日の調理 模擬店
	B 高齢者のライフヒストリーの聞き取り	大学所在地域の老人クラブと交流し、メンバーからライフヒストリーを聞き取ることを通じて異世代交流し、高齢者理解を深める。	地域の老人クラブ	聞き取り調査
	C 家から街へ～福祉マップづくり Part II	既存の福祉マップを収集分析するとともに、各種障害者にアンケート調査をおこない、日常生活に密着した福祉マップを作成する。	地域の視覚障害者、聴覚障害者、身体障害者、高齢者、妊産婦	冊子づくり 大学祭におけるマップの公開
	D 学童保育	地域の学童保育の活動に継続的に参加するなかで、児童や職員のニーズを発掘し、プログラムを企画実施する。	地域の留守家庭児童学級	通常保育への参加 誕生会、七夕会の企画実施
	E HAPPY HAPPY HAP	障害児の母親のグループ「ウッドムーン」との共催で、夏休み中の障害児の学童保育活動（HAP：障害児の冒険遊び場）を実施することを通じて、障害児とともに生きる社会づくりの課題や方法について考える。	重度障害児を抱える親のサークル 医師、看護婦、PT、OT、小中学校教員、保育士、在宅栄養士、主任児童委員、その他のボランティア 高校生・専門学校生・他大学生	大学内の遊休施設ならびに、市内の幼稚園を借用した活動の創造
	F おあしすの会	地域の在宅高齢者を対象にしたミニ・デイサービス「おあしすの会」の日常活動に参加するとともに、行事の企画・実施をおこなう。	地区社会福祉協議会 地域のデイサービス・グループ 在宅要援護高齢者支援ボランティアグループ（在宅保健婦のサークル） 市福祉会館	日帰りバス旅行・レクリエーションの企画実施

行事担当やサークル行事への参加者に影響がでること、さらに、必修のため履修人数が80～90人であるため1グループの人数が30人程度となり、学生の参加の程度にかなりの粗密ができたことなどがあげられる。再編成後は、12～20名程度に収まっている。

4) 活動の特色

- ① プログラム企画演習の場合、留守家庭児童学級を除いて特定の施設や機関ではなく、老人クラブ・子育てサークル・子ども会・在宅ケア支援ボランティアグループなど、地域住民による任意のグループ活動と連携を持っているところにまず特色がある。
- ② 連携する地域住民の居住する範囲あるいは活動拠点が、大学の所在する地域にかなり限定されている。これは、本学が公共交通網が疎であり学生の活動圏が限られがちな典型的な地方都市に所在しているという、地理的な条件が大きい。加えて、大学の所在する〈地元〉との相互交流を基本としているため、結果として学生は地域社会へ一時的に住民として組み込まれることになる。
- ③ 活動の企画の立案・実施にあたっては、学生の企画に地域住民が客として参加するだけでなく、できるだけ地域住民と話し合いの下に共同して作業を行うことを大切にしている。この対等な関係性が活動に及ぼす影響は大きい。なお、担当教員は、ファシリテーターとしての役割を果たす。
- ④ 予算措置としては、学部予算からの実習費補助として学生一人当たり2,000円が提供される。これを各グループ毎に独自に支出し、活動終了後、会計報告を提出させている。なお、老人クラブと共同企画に関しては、長寿開発センターからの補助を一部得ている。

5) 学生の感想

実習報告書から、学生の感想・総括の一部を抜き出してみると、以下のように〈地域とのつながり〉

〈コミュニケーションについて〉〈グループワーク効果〉〈達成感・感動体験〉〈マネジメント感覚〉〈対象理解・ニーズ把握〉にまとめられよう。なお、地域住民側への組織的モニタリングは、今後の課題である。

〈地域とのつながり〉

・広報がうまく行き届いて、大学に普通入らない高齢者、児童が来てくれ、大学のことを知ってもらえた。大学祭には学生だけの参加とおう雰囲気を変えられたと思う。このことで、社会福祉学部と地域とのつながりができ、これからの交流の基礎ができたので、関係を続けていくことが大切だ。(1期生)

・今回の実習によって、一般的な大学生活を送っていると味わうことの出来ない、世代交流や地域とのつながりを深めることができた。また、社会資源や人脈を活用することによって、世界がひろがった。様々な社会資源に積極的に働きかけ、地域社会とのつながりを深めていくことで、学生の力以上の素晴らしいイベントに成ることができた。(1期生)

・地元の「宮野を良くする会」の会長さんを紹介していただいて、地域にパンフレットを配布して回った。この活動で、大学祭に対する地域の方々のご理解を例年になく頂いたのではないだろうか。この時とくに感じたのは、この地域にはお年寄りが多いということである。今まで大学周辺に暮らす方々と直接触れる体験の無かった私は改めて驚いた。あるお宅では、昔の大学の様子や、最近の学生の態度などについての意見を多く聞いた。やはり、地域の方々が大学に関心を持って下さっていることを知った。学生の地域での生活を見守ってくださっているのも、こういった方々だと思うと、私たちはもっと地域との交流をもつべきではないかと思う。(3期生)

・企画演習を有意義なものにするかどうかは、私たちが地元老人クラブの方たちとの出逢いをいかに大切にできるかということにあった。しかし、結果的には、この出逢いを生かすことが

できず、その場限りの付き合いになってしまった。出逢い生かし、つながりをつくれるかは、自分自身の「人」と接する上での姿勢にかかっている。今回の演習では残念ながら、自分にはそれができなかったと思う。(4期生)

・私にとって何よりの収穫が、オアシスの会の方と知り合い、交流できたことである。色々な話しをし、介助したら何度も何度も礼を言われるお年寄りの優しさを実感した。そして、この演習を体験して最もうれしかったことは、私が街を歩いているときに、たまたま家の前に水撒きをしているメンバーに会い、話しをしたことである。私も地域住民の一員になったみたいで、何とも言えないうれしさをその日は忘れることが出来なかった。企画の立案・運営の仕方に限らず、学ぶことの多かった実習であった。(4期生)

〈コミュニケーションについて〉

・企画を実行していく中で、様々な人や団体から協力を得て、常に連絡や話し合いをして、コミュニケーションをとっていくことが重要だと思った。特に世代が違ったり、立場の違う人との共同作業は、それぞれの考え方が食い違うこともある。相手の立場や、考えを十分に聞いて理解し、尊重しなければならぬ。改めてその大切さを学んだ。(1期生)

・老人クラブの方と学生のそれぞれの意見を全て企画の中に組み込んでいくことは困難であった。最初はあまり不安には感じていなかったが、進むに従って、年齢が離れている分だけ考え方が違うという事に気づき、焦りだした。何とか全ての意見を尊重したいと思があるので、日を重ねるにつれて焦りと不安は大きくなる一方であった。

・今回、私たちはイベントの目的を「この企画を通して大学と地域のお年寄りとの交流を深める。また餅つきという日本の伝統的食文化について知る」という風に考えていたが、老人クラブの方に「真の目的は、老人を知り、高齢化社会について考えることである」と言われて驚

いた。(2期生)

・アニメームは言葉を使うことができない。そのために相手に自分の身体の動き、表情という表現力で伝えなくてはいけないのである。だから、どのようにすれば、相手に自分の心をつたえることができるのか苦労した。先生にもそのことを指摘された。この表現力は、人とのコミュニケーションや接することの多い社会福祉においても、役立つところは沢山あると思った。(3期生)

〈グループワークの効果〉

・老人クラブの人や外との交渉に、一部の人のみだけでなく、もっと多くの人に関わってもらいたかった。直接関わっていない人には、どのようにして決定されていったのか伝わりにくく、全体状況が把握しにくかったのではないだろうか。企画の規模が大きくなるほど、役割分担が増えるので、担当同士の連絡が大切だ。(1期生)

・イベント的には大成功であったが、準備段階ではリーダーに任せきりであったり、リーダーに指示されないと動かなかったり、逆にリーダーは全体を見るのが不十分で、反省することも多かった。(1期生)

・グループのみんなが纏まることができ、またのそ連帯感が学部内に広がった。皆が一つの目標に向かって団結できたことは、とても有意義であったと思うし、フォローシップを学ばせてくれた。(1期生)

・漠然とイメージしていたものが、具体的な形になっていくプロセス、それに自分も関わり、ひとりではできないようなことでもみんなで役割を分担し、それぞれが役割を果たすことで一つにものを作り上げていくことの素晴らしさを感じた。その中で、人が人と出会い、関わっていくことの大切さと難しさに気づいた。そして、どう関わって行けば良いのかということについて考えさせられた。(2期生)

・最初にこの企画演習の話しを聞いたときには、計画をたてたりするのが面倒だったし、絶

対に責任者になりたくないと思った。実際、責任者だった人たちを見ていると本当に忙しく大変そうに見えた。しかし、準備が進み当日が近付くにつれて、いつの間にか私は待ち遠しくなっていた。計画が進むにつれて、学部の中で新しい友達ができた。(3期生)

・私自身の感想としては、この実習は失敗だったと感じている。なぜなら、準備段階において、もう一步踏み込んで企画するべきであった。他のグループとは違い、前年までの流れをくんでいたということもあり、独創性やアイデアに欠けていた。話し合いの段階で、もっと主体性をもつべきであったと思う。また、「老人クラブの方々との交流を目的として」と書いたが、実際はそれが目的ではなく、交流をすることで何かを得ようという意識が必要であった。実際には交流は過程であり、その交流の向こうにあるものが目的であったはずである。私は目的と過程を取り違え、実習の最中にはその取り違えに気づけなかった。(4期生)

〈達成感・感動体験〉

・ゼロからのスタートで企画を進めていくことの難しさを実践から学ぶことができた。講義では学べないことだと思う。(2期生)

・台本については、様々な点で話し合いがなされた。何とか形になっていく舞台を見ていると、近付いてくる本番を前にして緊張する気持ちと、早く一般の人に見て貰いたいという気持ちがぶつかるのだ。それまで何度も投げ出そうとしたかわからない舞台であったが、あの時に感じた満足感は本当に嬉しく、感動させられるものであった。(2期生)

・大学祭の前日までトラブルはあったが、予想以上の反響であり、約4ヶ月かけて作り上げたものが、自分の予想を遙かに超えて成功したと分かったときは多大なる感動を覚えた。(2期生)

・子育ての中で起こりうる事故に対して、冷静に判断し行動できるように救急法を地域の人々と共に学ぶという企画を立てた。準備段階では

宣伝活動を行い、チラシを商店や保育所、他の子育てサークルなどに置いて貰った。これは地域の方々の理解と協力をととも必要とし、想像以上に現実の厳しさを実感することになった。快く引き受けて下さる所も多くあって、千枚を越えるチラシを配ったが、当日は結局4人の人しかいらっしやらなかったのは残念だった。(4期生)

〈マネージメント感覚〉

・当日については、役割によって人手が足りないところや多すぎるところなど偏りがあった。会場内の流れや来店者の案内の不備があったのでは無いだろうか。(1期生)

・今まで学生に面識のない人に招待状を出しても、来にくかったのではないだろうか。他に方法はなかったのか。

・私は「会計係」としてイベントに参加したが、この任務をうまくこなせたかと言えば、あまりできなかった。予算・決算の報告など、もっと広報と連携してすべきであったと思うし、もっと基本的なことである「見積り」などもよく分かっていなかった。依頼事業であれ、主催事であれ、お金の執行を伴わないものはない。必要経費を的確に計上し、魅力あるイベントの実施を可能にすることが大切である。そう考えると、私たちはまだまだであった。(2期生)

〈対象理解・ニーズ把握〉

・しかし、そんな私を引っ張ってくれたのは、同じ企画にとり組んでいる友人は勿論のこと、老人クラブの方々であった。老人クラブの方々のパワーには驚かされるばかりであった。(2期生)

・今回は福祉マップの作成グループに車椅子利用者が数人いたということもあり、車椅子利用者をおもな対象としてマップをつくることになった。実際に市内の公共施設や観光スポットを回ってみると、意外なことが分かってきた。それらのものは本来、障害者用につくられたもののはずであって悪いのは、これらのものが悪

意ではなく善意によって作られたものであるということである。(4期生)

・実習中に私たちは七夕会と誕生日会を企画・運営した。企画準備の段階では、自分たちの計画はそれなりに良くできている、と思っていた。しかし、当日になって実際に運営してみると、自分たちの立てた計画が、ほとんど意味の無いものになった。というのも、40人もの子どもたちを、自分たちの思い通りに動かすことは予想以上に難しく、子どもたちの注意をいかに引くかについての考えが甘かったことを思い知らされた。ほかに、実習中には色々な出来事があった、この実習が辛くなったこともあったのだが、今でも私の名前を覚えていて、声をかけてくれる子どもがいると、実習全てが素敵な思い出に変わり、もっと彼らと接したくなるのである。(4期生)

・HAPには、実習後も自主参加でボランティアとして活動に加わった。本当に楽しい夏だった。この企画実習で、私は少し、現場を知った。ウッドムーンの方が「どんな職についても、現場を知ろうとしなければ、本当にいいものはつくれない」というようなことを話された。その通りだと思う。頭でどんなに考えてみても、どんなに理解していても、実際に触れて見るのとは違う。本当に使える制度、設備、本当に求められている施設、プラン。この障害児の学童学童保育は、現場から生まれた、本当に求められている活動だと思う。切実な思いで育児している親、遊べる場所のない子ども。今までで一番たくさんの人に出会ったこの夏、たくさんの方の思いを聞いた気がする。いつも現場の声を大切にできる、そんな人に将来なりたいと思う。(4期生)

4. 地域に根ざした〈社会福祉実習教育〉とは

1) 地域住民と連携したプログラムの教育効果

5年間のプログラム企画演習の取り組みを振り返ると、まずグループワーク体験から1) 学生へ達成感や感動体験を与える機会となったこと。

(これは学習へのモチベーションを高める作用がある。) 2) 学部の学生間の連帯意識を醸成したこと。(学習環境としての学部のまとまりに繋がる。) さらに、地域の人々とのリアルでダイナミックな関わり体験から、3) 学生が〈社会人・あるいは生活者〉としての動きの感覚を身につけること。4) 対等な関係では学生にも責任が求められることから、学生にありがちな〈受け身〉の姿勢から〈主体的〉な姿勢への変換が求められること。4) 社会施設の所在やつながり、および人脈など、コミュニティの実体や社会資源に関する理解が深まること。全体として5) コミュニケーションの必要性を実感し、その能力が高まること、等の効果があったように思う。そしてこれらの効果の大部分は、地域の人々との出逢いによってもたらされたと言えよう。

この演習は、専門職としてのコミュニティワークの実習のレベルとは言えない。しかし、その前提となる〈共働感覚〉や〈コミュニティ感覚〉〈生活感覚〉〈コミュニケーション能力〉を醸成するなど、専門職に求められる資質の基礎部分、とりわけ〈アート〉の部分育てるプログラムとして効果的であるといえよう。社会性の乏しさ、孤立化傾向、大学における学習のモチベーションの低さ等々、近年の学生の質的な変化が指摘される中、社会福祉現場実習としても、この種の体験学習の重要性は増していくと考えられる。

2) 〈地域における大学〉と〈実習現場としての地域〉

教育行政の専門家である新堀通也は、地域と大学との一般的関係性について要約すると以下のように述べている。

義務教育段階の学校は、地域社会によって設立維持され、地域社会の義務教育を独占している。つまり、小・中学校では地域を制度的に特定することができる。しかし、大学となればたとえ公立といえども学区はない。大学にとっての地域とは本来、特定しにくく、色々な見方がある。大学を地域に開かれたものにするとか、地域の要望に

合致したものにするとか提唱されるが、その地域との関係は複雑であり、基準の取り方いかんによっては地域はいろいろに解釈される。

さらに今日、大学と地域の関係に新しい傾向が出始めている。大学の側には大衆化の傾向が、地域の側には「地方の時代」への志向が顕著である。学生の教育や学問の研究など個々の役割を越えて、地域においてトータルな役割を果たすことが大学に期待されるようになった。

地域住民の要求に直接応え、地域の要求する人材（例えば地方官吏、教員、医者、ソーシャルワーカー、地元経済人、主婦など）を養成するコミュニティ・カレッジ的な大学が育つようになる。「地方の時代」において、このような新しい、ローカルな大学は、伝統的なコスモポリタンでアカデミックな大学の通念からはみ出した中等以後教育機関、「レス・ノーブル」な高等教育機関として地域にとって不可欠な存在となるろう。⁷

本学は、県立大学という属性から、もともとその建学ならびに教育方針には、地域性を強く意識し、上記のようなコミュニティ・カレッジとしての方向付けを持っている。この場合の〈地域〉とは、一義的には全県レベルである。実習教育において全県レベルで地域と関わるのは、実習ⅡおよびⅢにおける配属機関・施設のプレースメント時であり、「実習機関連絡協議会」及び「施設連絡協議会」等を通じて、大学と配属機関や施設の連携を図るために、県立大学としての特質を最大限生かそうと努めている。

しかしながら、一方で学生の出身地は約半数が県外生であることから、必ずしも本県民の要請に直結する事が出来ないという矛盾が生じる。従って、その矛盾を克服するために、県外出身者における現場実習においても、今のところは出来るだけ〈帰省〉を原則として行い、それぞれの学生の出身地におけるローカル・コミュニティとの連携

を大切にしながら、「それぞれの地域に根付いたソーシャルワーカーの養成」というコンセプトを取り入れることにした。

一方、実習Ⅰのプログラム企画演習における〈地域〉とは、全県レベルというよりさらに狭く限定されているもので、大学の所在地域を中心に、学生がコミュニティの一員として感じられる範囲を想定している。これは、地元からの〈開かれた大学〉〈身近な大学〉という要請、あるいは地域の活性化に向けての大学の積極的関与への期待というニーズと、社会福祉実習教育における「ソーシャルワーカー養成のための基礎的な体験学習の場の設定」というニーズを統合して地域を設定するからである。さらに大学が、いわゆる「迷惑施設化」しないための工夫でもある。⁸

高齢化が進行する地域社会は、学生との交流により刺激や活力を得、反対に学生はたとえ在学中の短期間であっても、地域の一員として活動に参加する経験をもつことができるのである。これは、実習Ⅲのレベルで実施する「モデル実習」（草平論文参照）における地域と学生との関係とは質を異にするもので、どちらかといえばかつての大学セツルメント活動における「大学拡張（Univerusity Extension）」という思想の現代的展開の試みの一つとあって良からう。⁹

今後は、その活動の継続性や、新たな共同の機会の創出、教員の負担とのバランス等について、試行錯誤しながら、教育活動の実績を積みみたい。

〈参考文献〉

山口県立大学社会福祉学部「社会福祉実習の手引き」1995年～1999年（初版～改訂5版）

山口県立大学社会福祉学部「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ実習報告集」平成7年度版、平成8年度版、平成9年度版、平成10年度版

Johnson, L. C. "Social Work Practice ~A Generalist Approach" 4the ed, 1992

Thompson, N. "People Skills ~A Guide to Effective Practice in the Human Services" 1996

Doel, M., Shardow, S., Sawdon, C., Sawdon, D. "Teaching Social Work Practice ~ A Programme of exercises and activities towards the Practice Teaching Award", 1996

- 1 太田義弘編「ソーシャルワーク」海声社、1984年、他、佐藤豊道らの著作を参照。
- 2 太田義弘・秋山薊二編「ジェネラル・ソーシャルワーク」光生館、1999年
- 3 筆者の経験では、身体障害者療護施設ならびに救護施設において1例ずつ、実習生の受け入れについて、あらかじめ施設居住者の了解を得るために「居住者自治会」と直接交流し、特にケアプラン作成のプライバシーに関わる実習等についての相互理解と一定のルールについて協議した経験がある。施設居住者の障害の程度等、実習受け入れ条件はきわめて個別性が高いが、基本的には全実習施設・機関において、何らかの手続きを検討・工夫する必要があると考える。
- 4 米国の the Council on Social Work Education がまとめている Commission on Accreditation の指標や、英国の CCETSW が出している Practice Teaching の実習記録における評価指標等は、今後の検討の素材のひとつとなるであろう。
- 5 技術は、それを使う際にひとまとまり（総体）をなして現れるという意味で方法と切り離し得ない。「方法（メソッド）とは手続きの体系的な様式（モード）」であり、「技術（テクニク）とは方法の部分として用いられる道具」であり、さらに「技能（スキル）とは技術の熟練」である。なお、スキルはテクニクの熟練として示されるが、熟練とは客観的知識としてのテクニクが個人によって習熟されるので個人性主観性を示す面がある。しかも、実践においては、技術は技術としてしか現れない。仲村優一監修「社会福祉方法論講座Ⅰ」誠信書房、参照。
従って、社会福祉における専門技術の修得、

あるいは養成過程にあたっては、〈自己覚知〉など、ある程度学生の成熟度による個人差・主観性にまできり込まざるをえない側面がでてくる。この点からも再びアートが必要となってくる。

- 6 澤田健次郎編著「社会福祉方法論の新展開」中央法規、1998年、に掲載されている諸論文参照。
例えば、ソーシャルワークの果たす専門的機能からすると、「他の専門職業が独自の視点から狭く、深くという専門職分業制度の視点によって見逃されがちな〈全体としての人間〉という holistic な視点をもつこと」（統合機能）、「人権の視点をもつこと」（アドボカシー機能）、「社会関係の調整をメインにすること」（メディエイト機能）があげられているが、それらの機能を果たすためのソーシャルワーカーの備えるべき「観察力」「情報処理力」「柔軟性」から「アセスメント力」「プランニング（創造力）」「人間関係形成力」「コミュニケーション力」「社会的感受性」「自己覚知」の次元、さらに「エコマップ作成技術」「ジェノグラム作成技術」「会話分析力」「文章作成力」「ディベート技術」等々のテクニクに至るまでの様々なレベルの技能・技術の関係は、まだあまり整理されていない。
- 7 新堀通也編「大学評価～理論的考察と事例」玉川大学出版部、1993年参照。
- 8 新堀通也編、全掲書、190頁。ある意味で大学は地域にとっての「迷惑施設」となる傾向がある。……大学はもともと真理研究の客観的批判精神にささえられているので、社会にとって快く響く甘言ではなく、苦言や告発を呈する。反体制的なイデオロギーや運動の拠点に大学がなることは自然であり、その意味では大学は本来、社会、中でも体制にとっての「迷惑施設」であるが、大学は前に述べたように大学らしいほど、地元へ直接、利益を還元してくれない。むしろ地元から人材を吸収してこれを「中央」に送り出すと言う役割

をさえ演じている。……それだけではなく、大衆化した大学、レジャー施設化した大学、失業者や嫌業者の収容施設化した大学は、地域の文化的水準、文化的な雰囲気高めるところか、地元の純真な青少年に遊民のモデルを提供するにすぎない。

- 9 福島正夫、石田哲一、清水誠編「回想の東京帝大セツルメント」松岳社、1984年、参照。

SUMMARY

Teaching Social Work Practice in the Community

—A Programme of activities with the
Local Citizen—

Keiko KATODA

The Teaching team of Social Work Practice
One of the most important themes of the

teaching Social Work practice would be how to teach <Scientific Skill> and <Artistic Skill> as a Social Worker to our Students.

We the Teaching team of Social Work Practice in Yamaguchi Prefectural University have been trying to this theme. We need to consider carefully whether practice teaching is something we can do and want to do.

We arranged a programme of activities with the local citizen, in the early step of practice curriculum for the junior students.

We recommend the substance of this programme, and educational effects.